

# 修士学位論文要旨

(通信制)保健科学研究科

学生番号 M971105

氏名 横山 奈央子

## 慢性疼痛患者の健康関連 QOL に対する作業に焦点を当てた実践の効果 ーシングルシステムデザインによる検討ー

### 背景と目的

近年、運動器の変性疾患により、四肢・体幹に疼痛をきたす者が増加している。痛みは慢性化するにしたいが、身体のみあるいは心理のみの問題ではなくなる。そして、身体的な痛みの認知は様々な因子によって影響を受け、日常生活に影響を及ぼし、健康関連 QOL を低下させる要因となるため、慢性疼痛治療においては健康関連 QOL 向上を目的とした包括的なアプローチが求められる。作業療法は、作業に焦点を当て、クライアントの作業参加を促進することを目的とすることから、慢性疼痛の支援において重要な役割を担えと考えられるが、作業療法の効果を示した研究は国内外を概観してもきわめて少ない状況であり、作業に焦点を当てた実践報告はなされているものの、いずれも単一事例であった。また、慢性疼痛患者の介入において、作業に焦点を当てた実践における目標設定は非常に重要であると考えられ、目標設定を行うための有用な手段を比較検討する必要があると判断される。

本研究の目的は、作業に焦点を当てた実践が、慢性疼痛患者の健康関連 QOL にどのように影響するのか、シングルシステムデザイン（以下、SSD）を用いて明らかにすることと、NPI 興味チェックリスト（以下、N-IC）と Aid for Decision-making in Occupation Choice（以下、ADOC）を使用し、作業に焦点を当てた目標設定を行うための有用な手段を比較検討することである。

### 対象と方法

対象は、2 病院の外来を受診している慢性疼痛患者 6 名（男性 5 名、女性 1 名）であった。対象者は作業選択に N-IC を用いた群（以下、N-IC 群）3 名、ADOC を用いた群（以下、ADOC 群）3 名の 2 群に分類した。ADOC 群の 1 名は研究開始後 2 週目で、転倒骨折によりリハビリテーションが一時中止となったため除外され、最終的な分析対象は 5 名となった。方法は SSD の個体間時差型マルチベースライン法を用いた。独立変数は作業に焦点を当てた実践とし、従属変数は、作業療法終了後に健康関連 QOL を MOS Short-Form 12-Item Health Survey version 2（以下、SF-12）を用いて 1 週間ごと、疼痛強度は Visual Analogue Scale

(以下, VAS) を用いてセッションごとに測定した。データの分析は両期で得られた SF-12 のサマリースコア (以下, SF サマリースコア) と VAS の変化をグラフ化し, 目視法にて判定した。また, 目視法による分析を補完する目的で, 両期の値から自己相関係数を算出し, 系列依存性が棄却された場合に統計的検定を施行した。さらに, 回帰直線の決定係数 (以下,  $R^2$ ) を算出し, B 期のデータが回帰しない ( $R^2 < 0.4$ ) 場合に t 検定を実施し, Cohen's d にて効果量を確認した。統計解析は SPSS Statistics 21.0 を用い, 有意水準を 5% 未満とした。効果量の検定には G\*Power 3 を使用した。

## 結果

各対象者における作業に焦点を当てた実践の内容は, N-IC 群は社会的リクリエーション活動に関する内容が多く, ADOC 群は教育的文化的活動と日常生活活動であった。従属変数の変化を分析した結果, SF サマリースコアの役割/社会的健康 (以下, RCS) において, A 氏, B 氏に目視法, E 氏に SD 法で効果が認められ, 精神的健康 (以下, MCS) は B 氏に目視法で効果あり, 身体的健康 (以下, PCS) は A 氏, F 氏に SD 法で効果が認められた。VAS では, B 氏に目視法, C 氏に SD 法と t 検定, E 氏, F 氏に t 検定で有意差が認められた。

## 考察

SF サマリースコアの RCS において 2 名に目視法, 1 名に SD 法で効果が認められた。これは, 持続する疼痛によって病者役割に占有され, 作業役割を担うことができなかったものが, 介入を行ったことで作業役割を担うことができたためと考えられる。MCS においては 1 名に目視法で効果が認められた。これは, 精神的不安等により活動量の低下を引き起こしていたものが, 介入によりできるという有能感が高まり, 日課を行うことができたためと考えられ, 意味のある作業の参加状況に関する今井らの研究に準ずる結果が示された。PCS では 2 名に SD 法でのみ効果が認められたことから, 身体機能改善を自覚するには一定の期間が必要と推察される。VAS においては 1 名に目視法, 1 名に SD 法で効果が認められ, 3 名に t 検定で有意差が認められた。これは, 介入を行ったことで, 有能感が高まり, 行動的要因が改善したことが疼痛感覚を軽減させたのではないかと考えられる。しかし, 健康関連 QOL に影響を認めなかった者も確認されたことから, 疼痛感覚の強弱のみが必ずしも健康関連 QOL に影響しないことが示唆される。作業選択方法による検討では, N-IC 群は RCS 2 名, MCS 1 名, PCS 1 名, VAS 2 名, ADOC 群は RCS 1 名, PCS 1 名, VAS 1 名に効果が認められ, 2 つの評価法において選択された作業の意味の違いが結果に影響を与えたものと考えられる。今後は, 長期的な介入を行い, 有効性を検証するために介入群と対照群を設けた実験的研究を行うことを課題としたい。

**Key words:** 慢性疼痛, 健康関連 QOL, 作業に焦点を当てた実践, シングルシステムデザイン